

コミュニケーションの問題と言語教育

— 類似性と差異性をめぐって —

藤 田 正 春

はじめに

私たちは、日々ほとんど意識することなくことばを使って、人と交わり生活を営んでいる。そういう意味では、ことばは空気と同じく生活のごく密着しているといえる。19世紀以来めざましい発達を遂げてきた言語学を中心としてこれまで言語に関しては、多くの点が解明されてきているが、それでも、言語それ自体や言語の周辺には、まだ殆ど手がつけられていない問題や幾度となく問い返されているような古くて新しい問題が山積している。コミュニケーションの問題も、そういった解明し尽されていない問題の一つである。純道具的な言語観を排し言語の機能が多様であるとする立場をひとまず肯定するとしても、その第一義的な機能が他者とのコミュニケーションにあるとすることについては一応の承認が得られるだろう。言語生活の上で聞くこと、話すことの比重が大きくなっていることに加えて、視覚文化の発達によって見ることの果たす役割が高くなっている現在、言語活動を、言語的コミュニケーションだけでなく身体の動きといった非言語的コミュニケーションをも含めた全体的コミュニケーションの中で考えてみる必要があるように思う。

さて、本論に入る前に、最近経験したコミュニケーションの問題にもかかわる二つの話に触れておきたい。

一つめの話は、昨年六月頃から始めたのだが、ある外国人に日本語（正確に言えば東京語）を教えるための教案を作っていた時のことだ。問答形式で作っていた例文の中に、次のような一組を入れてしまった。

「鉛筆ヲ持ッテイマスカ。」

「イエ、持チマセン。」

この問答の中で答えの方にある「持チマセン」は東京語では、「持ッテイマセン」でなければならない。上京以来七年になるうというのに全く無意識のうちにこういう例文を挙げてしまったとは、これが、東京語のネイティブでない悲しさという所だろうか。ちなみに私の郷里（富山県高岡市）では、「鉛筆、持ットル」という質問形に対して否定で答える際、「ナン、持ットルン」と「ナン、持タン」の両方が答えとして可能であり、そのために使用頻度としてそれほど少なくない「ナン、持タン」の方がそのまま東京語に翻訳され「イエ、持チマセン」という形として出てしまったというわけである。このような文法的な間違いは、それを指摘されることによって一度間違いであることを理解すれば、あとは習慣という壁を乗り越えさえすればいいことであり、コミュニケーション全体から見れば、それほど大きな影響を及ぼすことはないように思う。

もう一つの話は、二カ月前に、初めて英語の弁論大会なるものを聴きに行った時のことだ。な

にしる初めてのことだったので、弁士のスピーチばかりでなく進行もすべて英語で行われるのには驚いた。弁士は、さすがに各大学ESBのよりぬきだけあって、その英語は流暢であり見事だった。だが、何人かのスピーチを聞いていくうちに、おやっと思うことがあった。それは、弁士が一体誰にことばを向けているのだろうかということだった。「それは、勿論、会場にいる聴衆でしょう。」という答が返ってくると、予想されるので、私が抱いた疑問の内容について、もう少しことばを補っておくと、この会の中で話し手として演壇に立った弁士はすべて日本人、聞き手として会場を埋めていたのは審査員ら数人の例外を除いてこれもまた大多数が日本人、そして、論題として数多く選ばれたのが“日本（あるいは日本人）見直し論”と、これだけをとってみれば、何処にもコミュニケーションの手段として英語を使わなければならない必然性が見いだせなかった、というわけである。会の性格が英語力の研鑽（さん）にある以上英語の使用が絶対であるとすれば、私が首をひねった原因は、論題の選ばれ方にあったのかもしれない。

コミュニケーション能力（communicative competence）といった方面に大きな関心が寄せられている言語教育の分野だが、発話場面に適した表現の選択の重要性にあわせて、それを如何に表現するか、また、よりよくコミュニケーションを成立させるためには、どのような問題を考慮する必要があるかといった点について本稿では検討してみたいと思う。

I 言語の記述過程における理想化

現実をありのままに記述するということは、至難のわざであるが、このことは、人間が主として音声を使って行っている言語行動についてもあてはまる。テープレコーダーに録音された言語材料を国際音声字母（IPA）を使って如何に精密に表記しようとしてもこれには限度がある。すなわちイントネーション・アクセント・プロミネンスといった要素をもれなく付けることは非常に難しいし、声の調子や速度などになるとお手上げ状態といってもよからう。(1)たとえ、そのような情報を付け加えることができたとしても、表記されたもので、生の言語材料そのものと言わないまでもそれに近いものを再現することは、音声学的な知識を身につけ、さらに専門的な訓練を受けてからでないと不可能であろう。というようなわけで、言語学では、様々な簡略化、抽象化を行って、生の材料を記述し、研究の対象にしている。ソシュールは、『一般言語学講義』の中で、言語学における学の対象を次のように、規定している。

言語の科学は、言語活動の他の要素がなくてもすませるばかりか、そうした他の要素が混入していないときでなければ可能でない。…言語活動は異質的であるが、上のように限定された言語は、等質的性質のものである。……(2)

要するに、ソシュールは、異質的なパロールではなく、等質的性質をもつラングに、言語の科学の基礎を求めたわけである。

さらに、もっと具体的にははっきりと言語理論が扱う対象を規定しているのは、変形生成文法の創始者チョムスキーである。彼は、言語活動に関連して起こるが文法的に関与しない条件（記憶の限

界など)に左右されない理想的な話者一聴者の関係の上に言語理論の基礎を据えている。(3)

ライオンズは、さらに、言語学が行うこのような言語行動の理想化を三つの項目にまとめている⁽⁴⁾。まず第一は、規則化(regularization)である。これは、先に述べたチョムスキーの考えの中にもあるが、実際の発話から言語行動に伴う諸現象(言い間違い、躊躇、吃音など)を取り除くというもので、換言すれば話者や聴者に潜在する言語能力(competence)と実際の発話(performance)とを区別する過程でこの規則化が行われる、ということである。⁽⁵⁾言語学プロパーでは、この理想化が最も異論のないものと言えよう。第二の理想化は、標準化(standardization)と呼ばれるものである。例えば、ここに二人の人がいて会話をしている。場面は、東京のとある会社の就職試験の面接会場で、一人が人事担当の50代の男性、もう一人が地方から上京してきた20前後の女性であるとしよう。二人の間に音韻・文法・語の面で、ある程度の違いがあることは、当然、予想することができる。しかし、こういう場合でも、私たちは、二人が日本語という同じ言語を話していると見るだろう。人は、それぞれに、自分自身の言語体系を持っている。性別・年齢・職業・社会的な地位といった要因を背景にした個人語と言われるものがそれであり、個人語は、より広い方言や訛の中にある。さらに、幾つかの方言や訛から一つの個別語(日本語、英語など)が成り立っている。ある言語集団のことばを記述する際に、個人性を捨象し、その集団の中にある最大共通項を拾い出す過程で行われるのが標準化である。最後に挙げられている理想化は、脱文脈化(decontextualization)である。これは、発話が依存している文脈の特徴を排除することによって行われる。毎日繰り返される言語活動は、たいてい、その際の場面や文脈に依存している。発話の一部が身振りに置き換えられたり省略されたりするというのが、これを象徴的に示すものと言えよう。適切さという観点から見れば、必ずしも文法的に完全なものがいいわけではなく、文法的には不完全であっても文脈に適していて解釈可能な断片的な文の方がその場にふさわしいという場合が少なくない。When are you leaving?という質問に対して、適切なストレスとイントネーションでAs soon as I can.と答えれば、それは、必要最低限の情報を含んだその文脈にふさわしい表現として受け入れられる。そして、答えの方として発話されたAs soon as I can.という文の断片を、文脈からはずしてI'm leaving as soon as I can.の形に復元する過程で行われるのが、脱文脈化である。

このような理想化を経て、言語は記述される。記述される時には、文字で書き表される。しかしながら文字では、発話に付随していた音声的な特徴や表情などが、そのままの形では反映されない。文学作品の中などで“涙ながらに訴えた”とか、“無然たる表情で語った”とかいったような形で、語り口を説明する必要があるのは、音声と文字のもつ特徴の相違をよく表している。

発話が理想化され文字化された段階で、一回限りの意味しか持たないすべての発話から、個人性が奪われるだけでなく、発話のスピード、音色、アクセント、イントネーションなどがすっかり消し去られる。

音声と文字の間の距離は、思いのほか大きいようである。教科書の中にある文字で書かれた会話を、音声にのせて実際に交わされているようなことばのやりとりにするのは、非常に難しい。では、

音声コミュニケーションいわゆる話しことばによる伝達を円滑に行うには、どのようなことを考慮すればいいかを念頭に置きながら、次にコミュニケーション一般の問題を考えてみたい。

II. コミュニケーションモデルの検討⁽⁶⁾

コミュニケーションということばの定義に関しては様々のもがある。語源的にはラテン語の *communis*（‘共通の’の意）に由来するという事なので、ここでは、ひとまず「誰かが誰かと何かを共有しようとする事」という風に考えておきたいと思う。

コミュニケーションに関しては、従来、多方面から研究がなされてきた。社会科学の方面では、H. D. ラスウェルが、コミュニケーション活動を記述する方法として「誰が／何について／いかなる通路によって／誰に対して／いかなる効果をねらって」という五つの柱を立てている。この区分は、ある意味で、コミュニケーション過程の分析を行う上で、非常に素朴なものであると言えるかもしれないが、その有効性は、現在もなお一向に変わっていないと言えよう。例えば、五つの柱の中の「いかなる効果をねらって」という項目は、意味論研究の分野で最近展開されている発話行為論に見られる、コミュニケーションにおける言語表現の意味（すること）の規定に関して、大きな鍵を握っている。⁽⁷⁾

一方、通信工学の方面では、C. E. シャノンとW. ウィーバーが、図1のようなモデルを提出している。

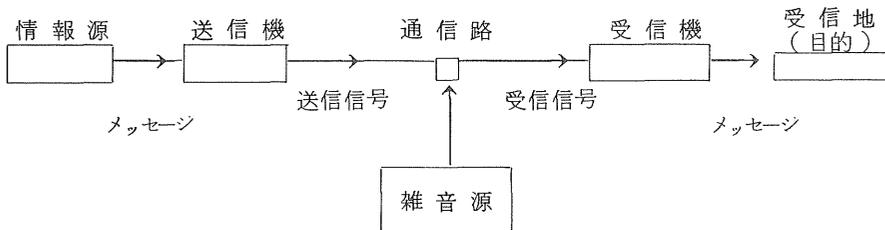


図 1

電話の場合で、この図を説明すると、情報源で選ばれたメッセージが、送信機によって信号に変えられ、電線という通信路を通して受信機へ送られるということになる。そして、この関係を人間の話しことばの場合に置き換えてみたのが図2である。

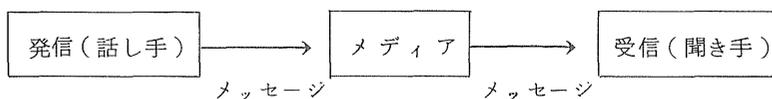


図 2

同一コード内にいる二人のうち、一方がコード化したメッセージを、他方が解くという形である。シャノンとウィーバーのモデルは、言語によるコミュニケーションを考える上では、いささか不備であるとされ、その後様々の形で音声学者や言語学者の修正をうけた。なかでも有名なのは、R. ヤーコブソンによるものであろう。ヤーコブソンは「言語学と詩学」の中で、多様な言語の機能を論ずるにあたり、言語伝達行動に含まれる構成要因として、図3のように、六つのものを挙げた。

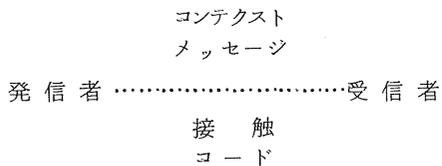


図 3

2図と比較して、つけ加えられているものとしては、まず、話し手と聞き手に(全面的あるいは少なくとも部分的に)共通するコード、次に、コミュニケーションを成立させたり持続させたりする接触、第三に、メッセージを支えるコンテキストである。ヤーコブソンは、

この三つを加えることによって、人間相互のコミュニケーションを理論的に可能にする必要十分条件を見出そうとしたわけである。

ところで、これまでに挙げた図式に共通する点として、発信者から受信者、話し手から聞き手といったように、伝達の方向が一方向的になっていることがあげられる。これに対しては、言語教育者の側から、コミュニケーション活動に見られるフィードバック的な性格をもっと考慮すべきであるという批判がなされている。C. ロベルジュは、次のように書いている。

…教育者の方は言語活動のより実際のレベルにおいて生身の生徒を相手に奪闘しなければならない。教育者は聞き手としての生徒そのものを話し手となるようにもっていかなければならないからである。教育と再訓練においては生徒に音声をききとらせるだけで満足することはできない。……言連鎖が受容で閉じるという仮説を立てた場合、生徒が自分の聞いたことを発音器官を使って再生しない限り、彼が学ぶべきメッセージ・素材をそのとき同化、理解したと誰が断定できるであろうか。…(8)

このように指摘した後、ロベルジュは、シャノンとウィーバーの図式に第四の輪を入れて、言語活動のモデルを完成させている(9)(図4)



図 4

以上、これまでに提出されたコミュニケーションモデルを検討してきたわけだが、最後に、ヤーコブソンが言語コミュニケーションを成立させるための要素として挙げたコードのことについて少し述べておきたい。ヤーコブソンは、コードを一つしか挙げていない。これは、話し手と聞き手が言語コミュニケーションを行うために不可欠な言語の共通性を強調するという点で当然のことだ。確かに、この共通性が全くなければコミュニケーションは成り立たない。しかしながら、実際には、話し手と聞き手がそれぞれにもつ言語コードの間に違いがあると考えた方がいい場合も少なくない。磯谷孝は、このあたりの事情を考慮に入れながら、コミッサーロフによる言語コミュニケーションの図式を提示している。(10)(図5)

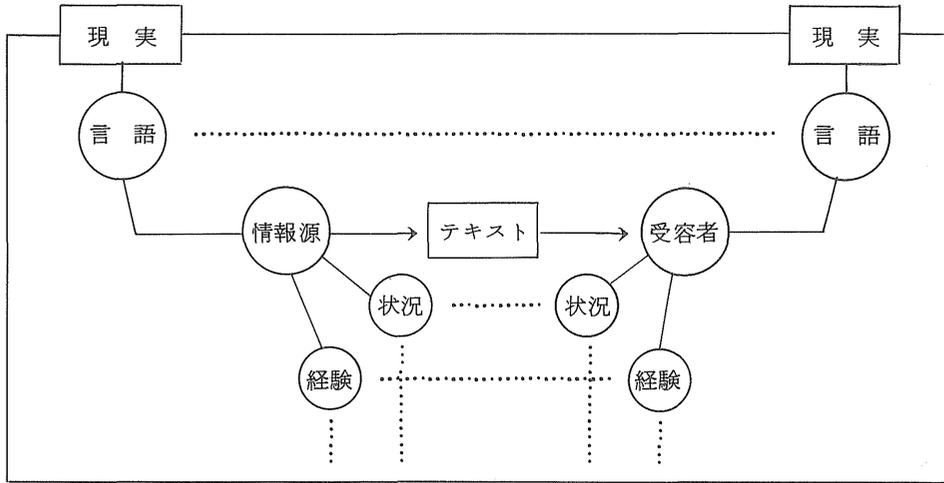


図 5

言語コミュニケーションの過程をまとめれば、まず、話し手が、聞き手と共有しようと思ふ意味を、聞き手の文法と共通性を有する自分の文法で、一つのメッセージにコード化し、次に、そのメッセージを受けた聞き手が、自分の文法に照らして、翻訳・再コード化して反応するというステップを踏むと考えられよう。

Ⅲ 非言語コミュニケーションにみる類似性と差異性

コミュニケーション全体は、大きく、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションとに分かれる。従来、言語学同様、言語教育の分野でも、前者に圧倒的な比重が置かれていたのは、言うまでもない。しかしながら、非言語行動の研究が進むにつれて、非言語的コミュニケーションに対する関心は、徐々に、高まってきている。ここでは、言語行動が成立する契機や言語技術の問題ともあわせて、非言語的コミュニケーションの果たす役割や言語教育の中でのその位置づけについて考えてみることにする。

これまで、非言語的コミュニケーションの研究を行ってきたのは言語学者ではなく、主として、文化人類学者、精神医学者、動物行動学者だった。そして、研究を進めていく中で、現在、非言語行動に見られる類似性を強調するグループと差異性を強調するグループとに分かれている。文化的背景を異にする人間の表現行動を研究し、そこに、ある種の類似性を発見したのは、C. ダーウィンである。ダーウィンは、この類似性を、人間が生得的に持っている特性によるものとした。しかしながら、これに対しては、繰り返し、多くの反論がなされた。例えば、E. ホールは、人間が空間をどのように利用するかは、文化的な背景によってかなり違うことを指摘したし、R. バードウィッスルは、身ぶりの記述、研究を進めていく中で、ダーウィンとは対照的に、あらゆる身ぶりが文化的に学習されてコード化された体系をもつものであるというような仮説を立てた。アメリカインディアンなどとの接触が大きな衝撃を与え、その結果、二人が、表現行動の文化的相違を研究する

ようになったようだ。(11)

一方、こういった反論に対して、ダーウィンの主張を支持する側の意見は、生物学者や動物行動学者の間から出された。例えば、I. アイブル＝アイベスフェルトは、カメラを向けている方向と実際に撮影できる方向が違うという特殊なカメラを使って、相手に意識されずに、人間の社会行動をフィルムに収めることに成功し、摺揆、男女の愛情表現行動、母親の育児行動などの中に、民族の違いを越えた共通性を見出した。(12)

このように、身ぶりや表情といった非言語行動については、大きく二つの異なった見方ができると思うが、ここで、もし、この両者の間で、意見の一致を見る可能性があるとするれば、それは、言語と比べれば身ぶりや表情の方が人間相互の間で共通点が多いということではなからうか。感情をのせる声の調子などは別にして、音韻や文法など言語の構造的な面に見られる違いは大きい。違いが大きいということは、理解しにくいということにつながり、時として、コミュニケーションの契機を失わせたり、言語の学習意欲を損わせたりすることにもなる。その点、身ぶりや表情には、相互に共通するものが期待できるので、不完全な表現ではありながらも何とか自分の考えや意志を相手に伝えようという原動力になるのである。

だからといって、勿論、言語の重要性を否定しようというわけではない。より正確に、より効果的に表現することを目指すならば、言語のきまりを豊富に知っていることや言語技術を磨くことが必要である(13)のは言うまでもないことである。

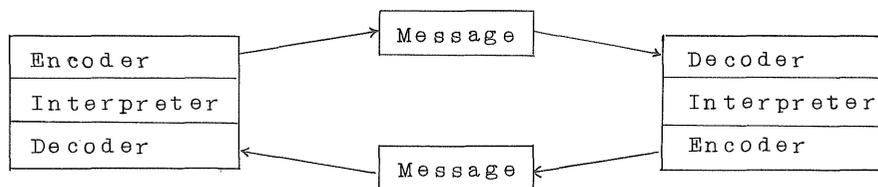
おわりに

はじめにの所で、私は、言葉が空気と同じようなものである、と述べた。しかし、これは、言語的に異質な世界と接する前のことであるような気がする。そして、一旦、言語的異質性を知るや、今度は、その異質性が、突如、人間的な異質性にまで飛躍してしまい、それまで持っていた言葉に対する自然的な感覚を取り戻せなくなってしまう。中学校段階で英語が嫌いになる学習者が出るのは、こんな所にも原因があるのではなからうか。人は人、多少、風俗習慣や生活様式といった文化的な面での違いはあるにしても、皆、同じように自分自身の生活を送っている。言語についても同じようなことが言えると思う。音韻・文法・語彙といった点で異なっている部分もあるが、人と人とを結ぶかけ橋であるという出発点においては、等しく、人間生活の中で機能している。個別言語の間に優劣などつくはずはなく、ましてや、その違いによってそれを話す人間の価値判断など、できようはずもない。言語の世界は、進化論とは無縁なのである。

今回、題の中では“英語教育”ということばを使わず、それを“言語教育”に変えた。日本において、“英語”ということばに、一種、独特の意味合いがまとわりついているということもあったが、一度、英語というものを媒体としての言語という共通性の枠の中で捉え直してみようと思ったからである。ことばのもつ共通性を契機として、等しく、それを使って経験の中へ飛び込んでいく時に、初めて、そこで、本当の意味でのコミュニケーション(伝え合い)が生まれると同時に、現実世界に広がる多様性も正しく理解できるのではなからうか。

註

- (1) これに類似した状況は、音楽における楽譜、地理における地図といった関係の中に見い出されるように思う。それぞれ何らかの形で大錠(なた)を振っているわけである。音声の速度などの表記については A. Mchoul (1978) などに、その工夫が見られる。
- (2) 『一般言語学講義』 P.28
- (3) N. Chomsky (1965) PP.3~4
- (4) J. Lyons (1977) PP.585~592
- (5) P. フェーブ(1973)によれば、次のような例がある。「ウィスコンシン大学の心理学者であり、動物学者であるリチャード・ウォレンとロズリン・ウォレンによって行なわれた素晴らしい実験は、どの程度まで聴覚錯覚が働くかをはっきりと示してくれた。両ウォレン氏は、最初テープに、『州知事は首都に集まってきた各州の立法議員(レジスレーチャーズ)と会った』という文を録音させ、それから注意深く、レジスレーチャーズのジスという語を削り、その代わりに咳の音をはめこんで、被実験者にそのテープを聞かせたところが、被実験者は無意識に咳の音の代わりにジスという語を聞き取ったし、ジスという語を抜き取って聞かせた時も同様であった。これは明らかに、前後の文脈で不完全な文を補ったのである。」P.58
- (6) ここで取りあげたラスウェル図式などについては、島村直己「人間コミュニケーションの諸問題について」(昨年の筑波大学人文科教育学会7月例会のハンドアウト)によった。
- (7) 西山佑司(1978)
- (8) C. ロベルジュ(1973) PP.11~12
- (9) *ibid.* P.12
また、フィードバック的要素を加味した図式としては、シュラムのモデルがある。



- (10) 磯谷 孝(1977) P.4
- (11) 拙稿(1978) PP.77~81
- (12) I. アイブル=アイブスフェルト(1970)
- (13) この点に関しては、金田一春彦『話し言葉の技術』講談社(1977)に、具体的かつ詳細に述べられている。

— 参考文献 —

- Chomsky, N. 1965. Aspects of the Theory of Syntax.
The M. I. T. Press.
- I. アイブル=アイベスフェルト 1970. (日高敏隆・久保和彦共訳)『愛と憎しみ』
みすず書房(1974)
- P. ファーブ. 1973 (金勝 久訳)『ことばの遊び — 人が話すとき何が起るか —』
佑学社(1977)
- 藤田 正春 1978 「英語教育における nonverbal communication の意義」
『人文科教育研究 V』
- 磯谷 孝 1977 「言語記号論の到達点 — 古典的記号論から文化の記号論 —」
『思想』 第10号 岩波書店
- Lyons, J. 1977 Semantics London: Cambridge University Press.
- Mchoul, A. 1978 'The organization of turns at formal talk
in the classroom.' Language in Society vol. 7, № 2
- 西江 雅之 1976 「“伝え合い”の人類学」 『言語』 1-4、6-11
大修館、収録
- 西山 佑司 1978 「意味することと意図すること」 『理想』 № 546
- C. ロベルジュ 編著 1973 『ザグレブ言語教育 — 理論と実践 —』 学書房
- F. ド・ソシュール 1947 (小林英夫訳) 『一般言語学講義』 岩波書店 (1972)